

第1回優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「ミドリノコエ」

沖縄県立那覇西高等学校二年 池宮奈々子



賢治のまちから
高校生★童話大賞



賢治のまちから
高校生★童話大賞

『シドリノコエ』

沖縄県立那覇西高等学校 二年 池宮 奈々子

光の道のかなた

太陽と樹が心をかかわす時

七色の橋のもとに

澄みきった『奇跡の泉』あり

その水 緑を救い

草は合唱し 木々はしゃべりだす

ここ数年、地球にはあまり雨が降りません。テイダの家でも物が全然育たないので、お父さんもお母さんも元気がありません。昔は緑だったとなりの森も今では、枯れた木々で黒い森となっています。

「はあ、せめて雨さえ降れば…。水さえあれば作物はそだってくれるのになあ。」

もう、この言葉も聞きあきてしまいました。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「あたしが、『奇跡の泉』を見つけて、緑でいっぱいにしてみせるから、元気だして。」

『奇跡の泉』とはこの地に伝わる伝説の詩の中でてくる泉の水をかけると、どんな所でも緑でいっぱいになるという泉です。

テイダは奇跡の泉の詩を信じ、一人森へ入っていきました。昔は葉が茂り、木漏れ日のさす温もりのある森でした。しかし、今この森は、太陽はギラギラと焼けるように熱く、枯れてしまった木々や葉は暗い色をしています。テイダはなんだか森がこわくなってきました。

それでも、テイダは奥へ奥へと進んでいきました。しばらく歩いてみると、何かなつかしいにおいがしてきました。

（あたし、このにおいを知ってる！）

だけど、なんのにおいだったのかは思い出せません。つられるように、においについてテイダは先に進みました。においの先には、色とりどりの草花に囲まれ、緑の中うずくまっているものが見えました。

「だいじょうぶですかー？」

テイダは大声で言いましたが、返事はなく、聞こえるのはすすり



賢治のまちから
高校生★童話大賞

声だけでした。

テイダはそろーりと近づき、大きなものの正体に驚きました。目をまんまるくしたまま息をするのも忘れるくらいです。

なんと、そこにいたのは、木々のように大きな巨人でした。巨人はうずくまり、ひたすら泣いていて、テイダが側にいるのにも、気づきません。テイダは少しずつ近づき、

「ねえ、どうして泣いているの？」
とたずねました。

声に巨人はビックリしてとびあがり、テイダのいる方をそおつと振り返りました。そして、テイダをじっと見つめ、心を許したかのように話しはじめました。

「森が死んでいってる。あんなに元気に歌っていた草達も素敵な咲かせる木々も、みんな枯れてしまった。もっといっばいとおしやべりしたかった。植物達はちゃんと生きていたのに…。」

そこまで言うと、巨人はまた泣きだしてしまいました。でもその声はとてもおだやかで優しい声をしていました。とても巨人が話している様には思えません。巨人は泣きやむ気配も見せないで、テイダは困ってしまいました。そして、思いついたようにこう言



賢治のまちから
高校生★童話大賞

いました。

「そうだ！あたしと一緒に『奇跡の泉』を探しに行かない？そうすれば、この森もまた緑でいっぱいになるかもしれない。」

それを聞いた巨人は涙でぬれた瞳をキラキラと輝かせました。そしてティダの手をとり、まるで子供のように喜びました。ティダもまるで自分のことのように一緒になってとびまわりました。緑がよみがえることを信じて。

でも、『奇跡の泉』が本当に見つかるかはわからないことです。しかし、今、それを口に出すのは、この大きな友達の顔から笑顔をなくすと思い、心の奥にしまいこみました。そして、二人は『奇跡の泉』を探す旅に出るため、その場所を後にしました。

巨人と一緒に歩いていたティダは思い出したように話しました。「あつ、ねえ巨人さんのお前は？まだ聞いてなかったよね。名前を呼ぶことで友達は始まるの。」

すると、巨人は少しおどろき、うれしそうに答えました。

「僕が友達？うれしい。今まで人間は僕たちみんな逃げた。君、僕のはじめての人間の友達。僕の名前はウッド。」

さっきまでの泣き顔は、すっかり違う顔になっていました。そ



賢治のまちから
高校生★童話大賞

の穏やかな空気は独特で、テイダはなんだか森に守られているような安心感を感じていました。

「あたしの名前はテイダ。少し休んだら出発しよう。ウッド。」

テイダは本当はもう歩くのも嫌なくらい疲れていました。今まで、こんなに長い距離を歩いたことのないテイダの足はもう棒のようでした。しかも、小枝やおれた切り株にひっかかり、足だけでなく手も傷だらけです。

それに気づいたウッドは、不思議な色をした滴を差しだしました。

「これ飲むと、傷もなおる。元気です。」

テイダがそれを飲むと、たちまち傷は治り、足も元気に動くようになったのです。

そして、もう一つ不思議なことに気付きました。まわりにある植物が話しをしています。テイダはこの不思議な現象におどろきと同時に楽しさを感じていました。

「テイダ、僕の血飲んだ。僕の友達の声聞ける。痛い傷も治った。」
さつき飲んだのがウッドの血だと知り、ちよつと複雑な気持ちでした。しかし、元気になったので、また、『奇跡の泉』を探し



賢治のまちから
高校生★童話大賞

に出発です。行こうとしたその時、辺りが、霧のように白くなりました。それはタンポポの綿毛でした。タンポポの種たちはいろんな国を飛んできたので何でも知っています。

「ヒマワリを探して。とても大きなヒマワリだよ。そのヒマワリがきつと『奇跡の泉』につれてってくれるから。」

そう言った後、タンポポの種たちは地面におり、すいこまれるように土の中に入っていました。でも、テイダ達には、そのヒマワリがどこにいるかなんてわかりません。でも、歩かないことは何も始まらないので、とにかく歩くことにしました。そして、まだ、生きてる食物たちの話によると、そのヒマワリはどこかのトンネルをぬけるとあるそうです。

テイダは、植物の優しさを感じ、もっと多くの植物とふれあってみたくなりました。

（その為には、絶対に『奇跡の泉』を見つけなくちゃ！）
テイダは前よりももっと植物のことを好きになりました。

太陽は相変わらず肌にささるように照り輝いています。しかし、ウッドの大きな体のおかげで、テイダの上にはいつも影がありました。それだけで、テイダは大助かりです。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

何時間歩いたでしょうか。あたりは少しずつ暗くなりはじめました。もう足もとも見えません。どうしようかとおろおろしているとどこからか体にずしんとくるような低い声が聞こえました。

「わしの体に穴がある。その中で眠れば安心だ。」

その声は、ティダとウッドの目の前からしました。よく目をこらすと、言われたとおり、そこには大きな穴がありました。ウッドには少し小さいようですが。

ティダはまるで、家にいるようにぐっすり眠れました。

やがて、太陽が再び顔を出したとき、きのうの声の主の姿はつきりと見えました。それは大きな大きなスギの木でした。何十年も何百年もずっとこの地球を見てきたような感じで、どっしりと座っています。

「この穴を抜けると、きつとヒマワリに会えるぞ。お前のように、素直で一生懸命な気持ちなら、緑を救えるはずだ。まかせるぞ。」

穴は見たところ、出口の光が見えないほど長いトンネルのようです。こわがっているウッドの手をひき、ティダは出口を求めて、歩きました。すると、思ったより早く、穴の外の光が見えてきました。ティダの足どりも心なしかだんだん速くなっています。目



賢治のまちから
高校生★童話大賞

の前に、まばゆい光の海が広がりました。その中心には、大きなヒマワリが空をあげ、まっすぐ立っていました。

その迫力といったら、体の大きなウッドでも負けそうなくらいです。鮮やかな黄色は、青い空に映え、まるで太陽のような存在に感じました。

「何しにきたの？」

少し怒っているような口調にウッドは逃げたくなりましたが、ふるえた声でヒマワリを見つめ、こう言いました。

「お友達を生き返らせたい。あなた『奇跡の泉』の場所知ってる。

僕達、そこに行きたい。」

テイダはびっくりしました。だってウッドがとても堂々と思いを伝えようとしているのです。しかし、ヒマワリは高い声で話しはじめました。

「本当に『奇跡の泉』があると思ってるの？それで植物が生き返ると？人間達がこわした自然なのに、どうにもならなかったから、奇跡の力をかりるの？」それは、間違っではいませんでした。人間は自分の都合で植物を焼いたり、切ったりしてきたのです。さらに、ヒマワリは話しつつづけました。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「植物がどんな風に生きているか分かる？少しでも人に喜ばれようとしてるの。春には美しい花を咲かせ、夏には枝いっぱい葉を茂らせ少しでも影をつくり、涼しくさせている。秋にはその葉をキレイに色づけ、冬は寒い中太陽の温かい光をみんなに分けてあげるために枝に葉をつけないの。人が花を摘む時は、植物達は痛いけど、それが運命だと受けとめてる。そんな植物の運命が人間の手で無理やり変えられているのにまた生き返らせ苦しい思いはさせたくない。」

ヒマワリの叫びにティダは胸がしめつけられるようでした。植物がそうやって生きていたなんて、想像もしたことがありません。ウッドは植物の気持ちが痛い程わかるので、泣きだしてしまいました。

その時です。辺りが白くなりました。タンポポの種たちです。「ヒマワリさん、みんなの為を思っていてくれてありがとう。でも、仲間が増えるとヒマワリさんもうれしいでしょう？この子達なら大丈夫。また世界中を緑でいっぱいにしてくれるから。」ヒマワリはしばらく黙っていました。

「絶対、緑をよみがえらせてみせる。だからお願いします。」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

それを聞いたヒマワリは少し上向きだった顔をまっすぐ正面にむけました。

「光の指す先に『奇跡の泉』は現われるでしょう。緑を思う気持ちが強ければ大丈夫です。」

それは、安心したようなでもやっぱり、強い声でした。テイダはヒマワリにすべてをまかされたような気がしました。

「やった。やっつとで行ける。さあ、光の先へ急ごう！」

テイダはうれしくてたまりません。でもウッドは黙ったままどこか不安そうです。

光の方向へ歩いている時、テイダはみんなの声を思い出していました。最後まで助けてくれたタンポポの種の可愛らしい声。おじいちゃんのように温かいスギの木の声。強く心にひびくヒマワリの声。みんなのために、決意をかたくして光の先へと進みます。

光の先には森の出口がありました。

（ここを抜ければ『奇跡の泉』だ。）

テイダは急ぎ足で出口へと向かいます。しかし、ウッドは行きたくなさそうにします。しんなウッドの手を引きテイダは森を出ました。そこにはウッドの嫌がる気持ちがわかるような景色があ



賢治のまちから
高校生★童話大賞

りました。

その光景を見たウッドは泣き叫びました。その声はとてつもなく大きく、涙は雨のようでした。

そこには、まだ、火がついている場所もある、焼きはらわれた森のひどい姿がありました。

「イタイヨ、アツイヨ」

火のついている植物の声は、胸につきささるように痛く感じます。その声を聞き、テイダはあふれでてくる涙を止めることができませんでした。二人とも、我を忘れたかのように、大泣きです。何時間涙を流しつづけたのでしょうか。テイダがまわりを見た時、火は消え、ポツリポツリと緑の部分が見えました。

また、二人の流した涙がたまって、泉のように見えました。しかし、涙は止まりません。ウッドの涙は雨のように落ちて、涙がたまった泉に虹がかかっていました。それは、奇跡の泉の詩のおりの泉です。大きなウッドの涙は世界中に降りました。それをあびた地面はうるおい、次々と緑が生まれてきたのです。

また人々はウッドの涙をあび、植物の声が聞けるようになったのです。そして、世界中の植物たちはおしゃべりをはじめました。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

生き生きと

話す植物を見た人々は、今までのことを心から反省しました。緑の前でこう誓いました。これからは、緑を大切に一緒に生きていこう、と。

一方、ウッドは体中の水分を出しきってしまう程の泣き方です。でもそんなウッドに生きかえった緑たちの声がとどきました。人々が植物に優しくなったことを聞くと、ウッドの涙は止まりました。

でも、その時ウッドの体はテイダの手の平に乗るほど小さくなっていたのです。テイダの温かい手の中で、ウッドは小さい、細い声で、

「ありがとう」

と、言いました。その一言はテイダの心にとても大きくひびいていました。ふと手の平を見ると、ウッドではなく、一粒の種がありました。テイダはそれを土に埋めました。すると、テイダの目には次から次へと涙があふれ出てきます。

その一滴の涙が種の上へと落ちました。

次の瞬間、土から芽がはえ、細い枝はいつのまにか太い幹にな



り、大きな大きな樹になりました。その樹は優しく、おだやかで、強い鼓動をしていました。

樹は世界中の緑を見守っているようでした。

そして、人々は植物を摘むとき、食べるとき、助けを貸りるとき、一言話しかけるようになったのです。そうすると植物達は、うれしそうに摘まれるのです。

緑の声は、心に直接語りかけられるように聞こえます。いつの日か、人間と植物達は、心の通じあった友達のようにになりました。